

---

# Strange Labyrinth

タクシャイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

S t r a n g e            L a b y r i n t h

### 【Nコード】

N 6 8 5 6 U

### 【作者名】

タクシャイ

### 【あらすじ】

2256年9月19日 午前2時46分 HCP（人体強制プログラム）を作った科学者が、悪の組織Black Crystalの1人に殺されてしまった。

それから約5年半後ある少年が普通に生活をしていた。

名前は影斗優也

年齢は、16才の高校二年生だ。

彼には勉強の才能も運動の才能もない。

だが彼には1つだけある能力をもっていた。

だがその能力は日常生活ではあまり役に立たないものだった。

そして生活していくとある日、謎の組織Black Crystalに友達と共に、謎の組織Black Crystalの実験施設クリスタルパレスに拉致される。

そこには優也を合わせた20人の人々が同じように拉致されていた。そして集められた20人に地獄のような体験を味合うことになる。

しかしそこで役に立たなかった優也の能力が役立つことになる。

今ここに優也達と謎の組織Black Crystalの仕組んだ罠とがぶつかり合う推理battleが行われる。

**p r o l o g u e    〽 2 2 5 6 年 9 月 1 9 日    午 前 2 時 4 6 分 〽 ( 前 書 き )**

この作品では後にグロイシーンがありますのでご了承ください。

**prologue** 2256年9月19日 午前2時46分

カチカチカチ・・・

暗闇の部屋の片隅で誰かがパソコンを打っている。

「やっと…やっとこれで長年のHCPに終止符を打つことができる。」

コツコツコツ…

静かな廊下に不協和音が奏でられた。

ガチャ

誰かが扉を開けた。

「だ、誰だ貴様は！」

不協和音の奏者は左手のポケットからレーザー銃を取り出して、

「悪いが、HCPは政府じゃなく、我らBlack crystal  
lがいただく。」

「や、や、やめろー！」

バーン！！！！

鋭い爆音が夜の奥底へ消えていった。

2256年9月19

日  
午前2時46分

## 第二話　く朝く

く2262年5月21日午前6時33分く

ある少年が目覚めた。

「あゝよく寝た。」

と、猫がけのびをする時みたいな眠そうな声でウォーターベッドからゆっくりとした動きで起き上がった。

「優也早く起きてきなさい。」

という、明るい声でその。優也という少年を呼んだ。

「分かってるよく」

と、寝惚け眼のまま母さんに呼びかけた。

エスカレーターを降りると、まだ作りたてのハムエッグとパンが机の上に置かれていた。

「早く食べないと、高校に遅刻するわよ。」

母さんのいつものお決まり言葉だ。

「分かってるよ。」

と言いながら、ハムエッグとパンを口にもぐもぐさせたまま優也は

カプセルマンションの108号室から勢いよく飛び出した。



### 第三話　　学校1

家から走ってやっと高校の標識が見えてきた。

「公立国分高等学校直線300m」

この標識に書いている学校が僕の通う公立国分高等学校だ。  
生徒数は全校で450人の普通の学校だ。

1年前はワクワクしてこの学校に入ったが、現在では面倒くさいだけ  
けている

なんとか遅れずに学校に到着した。

息がはーはーいっているが走ったおかげでいつもより学校にはいつ  
もより3分早くついた。

「おーい、ユーヤン。」

校門につくと何か楽しげな声で話す斗真がいた。

ちなみに、斗真というのは本名は高木斗真という名前で中学からの  
親友だ。

それと、ユーヤンというのは友達みんなが僕を呼ぶニックネーム  
みたいなものだ。

「やあ斗真。なんか良いことあったのか。」

と、聞いてみたら斗真は待ってましたと言わんばかりに

「よくぞ聞いてくれた。」

「実はな昨日…」

「二組の有里華ちゃんとはなしたんだ！」

と、どうだまいったかと言わんばかりの満面の笑で言った。

「えー、ホントかよー。」

「どんなことしゃべったんだ？」

って、ちょっときいてみたところ、なにやら恥ずかしそうに顔を赤らめながら僕に耳打ちで言った。

「昨日教室で、新作の立体アクションゲーム、straight fighting? (ストレートファイティング?) を休み時間やってたら有里華ちゃんが「あの一、悪いんだけどね、ちょっと今本読んでるからちょっとゲームやめてくれないかな?」って話しかけてきてくれたんだ。」

と斗真は言った。

その話を聞いて僕は、斗真に

「あのさー斗真、それってただ嫌がられただけなんじゃないの?」

と言ったら、斗真は

「そ、そんなー!」

とさっきの楽しそうな表情とは裏腹に叫びながら泣き出しそうな顔で一目散に校舎の中に入ってしまった。

こんなことをしていたらもうホームルーム5分前になっていた。

僕は、また本気で2－1の教室に走ることになった。

## 第四話　学校2

「キンコンカーンコン」

ハアハアハアと息をまたも切らしながら教室の窓側の最後の席に付いた。

なんとか優也はホームルームに間に合った。

「ガラガラガラ」

ドアが開く音がして担任の緑川先生が入ってきた。

緑川先生は、本名緑川静香という名前で普段はキリッとしているがホラーが実は苦手な先生である。

「みなさんおはようございます！」

先生がいつもの恒例のキリッとした挨拶をした。

だが生徒で挨拶をするのはクラスの3分の1ほどであった。もちろん僕は挨拶などしていない。

「みなさん、朝のホームルームにしますが何かこの教室で昨日と今日で変わったことに気づきましたか？」

クラスのみんながざわめく

「えー、どこが変わったって言うんだ？」

「全くわからないよー」

「かわったところなんてないよなー」

みんながこう言ってる間僕はあることに気がついた。  
僕は緑川先生に向かって堂々と手を挙げた。

「緑川先生！教卓の横の窓ガラスにヒビが入っています。」

緑川先生は優也の発言を聞いて、

「影斗くんすごいわね！そのとおりです。昨日はヒビなんて入って  
いなかったのに今日先生が朝早く覗いたときにヒビが入っていました。  
ごくわずかなヒビですがヒビを付けてしまったかもしれない人  
は、後で職員室に来てください。以上でこの件の話は終わります。  
一時間目は体育なので遅れずにグラウンドに行ってください。  
これでホームルームを終わります。」

先生はすたすたと教室を出ていった。

先生が出ていった後教室は、がやがやと騒ぎ出した。

「やっぱりすごいなユーヤンの目は！」

「影斗くん視力いいからねー！」

「そんな目がいいなんてやっぱり羨ましいよー！」

と僕に向かってみんな言ってきた。

「実は僕は、みんなに目がいいと思われている。」

視力検査の時も右左2.0をずっとキープしているし、小さな消し  
ゴムを教室のどこかに落としちゃったという相談を受けたときもす  
ぐに見つけてあげた。

だが、本当は僕は視力は0.8くらいである。なぜ、僕が窓ガラス  
や小さな消しゴムをすぐに見つけられたかというと、僕は人よりも  
洞察力に優れているからである。

ピンと来ないだろうが、窓ガラスの件は緑川先生が6秒に一度5°。首を窓ガラス側に傾けていたのである。その方向を見ればすぐにヒビを見つけることができた。

消しゴムの件もみんな消しゴムが転がっていくのを感覚的に脳で確認しているため自分できづいていないが、体を1・75°。消しゴムの方向へ傾いている。だからその方向をたどっていけば自然に消しゴムのところへ行き着く訳である。

視力検査は、検査員の目を見ていれば目がその答えの方向を0・1秒見ているので簡単に

分かることができる。

なぜこのような洞察力を身に付けたかはわかっていない。

物心ついたときにはもうこの洞察力が身についていた。

この洞察力のことは誰にも話していない。なぜなら、ばらすとややこしいことになりそうだったのだからである。だからみんなには視力がちよつといいくらいと言うことにしている。」

あれから1〜6時間目の授業まで終わって帰りは一緒に斗真と帰ることにした。

エアカーが飛び交う中、僕たちは、がやがやと話していた。（エアカーとは2170年に旧アメリカ合衆国（2216年にアメリカは旧カナダと旧メキシコと合併して新アメリカ共同国となったのである。）のステッドリアンソニーという人物が重力コントロールの法則と言う物を証明し、空気中を自在に飛び交う車（エア―、コントロール、カー）略してエアカーを開発した。）

「なあユーヤン、これからどっか店寄らない？」

「まあいいけどどこの店に行くのか？」

「本屋で電子書物のパーソナルデータを買に行きたいんだよね。」  
（パーソナルデータとは、この時代では本は紙に印刷されず電子書物つまりデータとして保存してそのデータを見るところという方式になった。）

「それならいいよ、別に家帰ってもすることないし。」

斗真は満足そうな顔で

「ヨッシャー！じゃあ本屋へ行くぞー」  
と張り切り出した。

僕は子供みたいな斗真を後ろから笑いながらついて行った。

## 第五話　ひとときの喜び

学校から歩くこと15分でスカイハイタワーの102階に着いた  
（スカイハイタワーとは、優也たちが暮らしている街のど真ん中にある345階建てのタワーである。いろいろな店があるためスカイハイタワーはいつも人々が買い物をしに来る。最上階には光望遠鏡があり、100km先まで見渡すことができる。）

「ふー、やっと着いたあ。」

斗真が疲れた雰囲気と言った。  
僕は呆れた顔で

「斗真が行きたいって言ったからきたんだぞ。」  
と、言い返してっやった。

「わりーわりー、冗談だってユーヤン。さあ本屋に入ろう。」  
と斗真は、笑いながら言った。

僕は、斗真の後につずいて本屋の中に入った。

「ところで斗真、お前何の本が読みたいんだ？」  
と、気になっていたので斗真に言ってみた。

「そりゃーもちろん今人気のドラバスに決まってるだろう  
と、自信満々で斗真が答えた。

（ドラバスとはドラゴンバスティングの略で、ドラゴンを仲間にできる少年がドラゴンと共に、デビルたちをやっつけていくというフ



アンタジー物語のことである。人気がありすぎて昨月ゲームにもなった。」

僕は、納得した表情で

「そうかードラバスかぁ。でも言ってくれたら僕が貸してあげたのに。」

と笑いながら言った。

斗真はびっくりした様子で

「なんだよー、ユーヤンドラバス持ってたのかよー。じゃあ母さんに頼まれた推理小説を買って帰るか。」

と、ため息をつきながら推理小説コーナーへ行った。

「じゃあ僕も何かの本のデータでも買おうかな。」と思いながら面白そうなSF小説を見つけたので、レジに向かった。

レジに向かってみると、そこには見かけたことのある人がいた。

長くもなく短くもない普通の長さのストレートヘアーの僕と同じくらいの年のかわいい女の子がレジの店員としてお客を待っていた。

「斗真が怒られたという2組の有里華ちゃんだ。」

と僕はちよつとびっくりした様子で心の中で思った。

「なんでこんなところでバイトしてるんだ？」と思っていると、有里華ちゃんの方から話しかけてきた。

「いらっしや…あれ、1組みの優也君だよ…ね？」  
と、疑問そうな口調で言ってきた。

「そうだけど・・・なんで僕のこと知ってるの？」  
と、こっちも聞き返してみた。

「やっぱり優也君かー。だと思った。だって優也君はクラスで有名だよ。今日も窓ガラスのヒビを1人だけ見つけたんでしょ？もうみんなに噂がたくさん流れてるよ。」  
と、可愛らしい表情で話した。

「そうなんだ、僕にとってこれくらいしか取り柄がないから・・・」  
と僕は笑いながら言った。

すると有里華ちゃんが真剣な表情で僕に、  
「そんなことないよ！優也君にはもつと多分いいところがあるよ。だから自信をもって頑張って！じゃあそろそろ本のデータ整理をしないといけないからバイバイ。」  
と僕に行ってからレジを出て行ってしまった。

「こんなに女の子と話したのは、初めてだ。」と、思いながら、浮かれた気分で斗真を探した。

斗真はすぐに小説コーナーで見つけた。

「おい斗ー真ー。なんかいい本見つかったかー？」  
と試しに斗真に聞いてみたら、

「うーん、あんまい本なかったわー。またの機会にするよー。」  
と残念そうにしていた。

「そろそろうちに帰るか？」  
と、斗真が僕に聞いてきたので僕はその意見に賛成してスカイハイ

タワーを後にした。

僕は、今日有里華ちゃんであったことは、斗真には言わないことにした。

なぜなら、言ったらややこしいことになりそうだからだ。

「明日も頑張るぞー！」と思いながらいええスキップしながら帰ったが、

「明日からあのようなことが起きるなんて優也は思ってもいなかった。」

## 第六話　（突然の襲撃）

本屋から帰った僕は、今日有里華ちゃんと会ったことを思い出していた。

「いままで僕にあんなこと言ってくれた人はいなかった。…こんな僕に」

僕は自分が好きではない。なぜなら、どの才能もほかの人よりも下であるからである。

運動なんか、100m走でビリしかとったことないし、勉強だっていつ下の下である。

ただ一つ的能力を除いては…

### 「洞察力」

この力が日常生活でなんの役に立つのだろうか？ いや、絶対に役に立たない。

どうせならもっと運動神経や学力をもって生まれてきたかった。」と、今思ってもなんにも変わることはないと考え球体ウォーターベツドに入り眠りに落ちた。

次の日の朝、僕ははいつもよりも30分早く起きたので、いつもより早く学校に行くことにした。時間に余裕があったので、ゆっくり歩いていると偶然、斗真に出会った。

「あ、斗真おはよう。今日は、早いな。」  
と僕は、斗真に言った。

「あーちよつと自動睡眠装置がちよつとバグって早く起きちゃったんだ。」

と、笑いながら斗真が答えた。

（自動睡眠装置とは、機械から特殊な微弱睡眠電波が放たれ、設定者の脳に作用して、設定した時間に起きれるという装置。ちなみに僕のはぶっ壊れてしまっている。

「そうなんだ、じゃあ学校に行くか」

と斗真に言った瞬間、後ろから誰かが走っててくる音がした。

後ろを振り返るとそこには有里華ちゃんがいた。

斗真は

「ユ、有里華ちゃんだ！」

と、なんだかあたふためいていた。

「ど、どうかしたの？」

と、とっさに僕は有里華ちゃんに訪ねてみた。

すると有里華ちゃんは走りながら、

「に、逃げ」

と言いかけた瞬間どこからか有里華ちゃんの体に何かレーザーみたいなものが命中した。

「ゆ、有里華ちゃんどうしたの！ね、ねえしっかりしてよ！」

と僕は有里華ちゃんの体をさすって問いかけただが、返事がない。どうやら気絶してしまったようだ。

するといきなり斗真が

「誰だ有里華ちゃんをこんな目にあわしたのは！さっさと出てこい

！  
」

と今までで聞いたことがないくらいの大声で叫んだ。

斗真が叫んだあといきなり空からサングラスをかけた190cm位の  
大男が降りてきた。

「ど。どこから現れた！空には何もなかったのに！」  
と僕は驚きの表情で声が震えながら言った。

すると、大男は初めて口を開いた。

「現場を見られてしまったからには、お前らにも付いてきてもらおう。」

と低い声で僕たちに麻醉銃らしき銃口を向けた。

プス

大きな音はなかったが確かに僕の首に何かがめいちゅうした。

どンドン…意識、  
が薄　れ…て…

「お……き……」

「おき…て…也………ん」

「ん？…僕は誰かに起こされる声で目が覚めてきた。どうせ母さん  
だろう。」

「おきて優也君！」

僕は目が覚めた。

目の前にいるのは、かあ：いや違う。

「ゆ：有里華ちゃん？」

僕はうつろ眼のまま、前にいる人に疑問そうに話しかけた。

「よかったー、気がついたんだね。」

と涙目で僕を心配するように行った。

「僕が死んだとでも思っていたのだろうか？でも僕のために涙を流してくれなくてもいいのに」

と僕は悲しげに思った。

「こ：ここは：どこですか？」

と僕は有里華ちゃんに不安そうに聞いてみた。

「わたしにもわからないの。急に変な気配がしたからから逃げたいら、優也君たちにあってそこからどうやら私も気絶しちゃったみたいで。」

と有里華ちゃんは僕にいきさつを教えてくれた。

「変な気配って？僕たちにはわからなかったんだけど。」

と疑問を僕は有里華ちゃんに質問してみた。

すると有里華ちゃんは

「わたし実はほかの人よりもね、気配とかに敏感なの。50m半径なら誰かが近づいているとかってわかるんだよね。生まれつきなんだ。」

と、僕と同じで何か特殊能力をもっていることを話してくれた。

「ところで、斗真は？大丈夫かな？」

と、斗真のことが心配になって有里華ちゃんに聞いてみた。

「斗真くんなら、まだ優也君の後ろで寝てるけど。」

と僕の後ろを指さしながら教えてくれた。

僕は後ろをちらっと振り向いてみたら斗真がすやすやと眠っていた。

そしてこれからのことを有里華ちゃんと相談しようとしたとたんいきなり有里華ちゃんが

「なにかくるわ！」

といきなり僕にむかって叫んだ。

すると、いきなり立体ホログラムみたいなものが浮かびあがった。立体ホログラムには、ただ大きくB・Cと言うアルファベットで作られたロゴみたいなものが回って表現されていた。

「な、なんなんだこれは！」

あまりに驚いた僕は大声で叫んでしまった。

その声で斗真を起こしてしまった。

「あーよく寝たー」

「あれここはどこだ？」

まだ起きたばかりなので斗真はまだ少し寝ぼけているようだ。

そして少しすると、いきなり部屋の壁が上に

「ズ、ズ、ズ…」

とゆっくりと大きな音を立てて上がっていった。



するとその壁のおくに17人のほかの人たちがいた。

「ようこそクリスタルパレスへ20人の選ばれたみなさん。」  
と、立体ホログラムからボイスチェンジャーから出だした声み  
たいな音声が流れた。

「一体どうなってるんだ。」

僕たちが置かれている状況を把握することができなかった。

## 第七話　くようこそクリスタルパレスへ

僕は正直今僕たちが置かれている状況を把握することができなかった。

さっきまで普通に学校に行こうとしていたのに、今では、いきなり変な気色悪い赤く塗り潰された、大きなエントランスホールに17人の見たことない人たちがいきなり現れたBとCの立体ホログラムが顔を合わせているのだから。

僕だけではなく、有里華ちゃんや斗真も同じことを思っていることだろう。

僕はとりあえず辺を見回してみた。

17人のほかの人のの中には、小学生くらいの女の子や40代過ぎのなにやら金持ちな社長みたいな男、それに僕と同じくらいの年の銀髪で髪がちよっと長い男子がいた。

その17人の人たちも

「何ここ？どこなの？」

と言う人や

「なんだここは早く私は会社に戻らなくては」

と言う人もいた。

なかには、涙を流してうつむいている人さえいた。

趣味の悪いエントランスホールの中ががやがやとうるさくなってきた。すぐ立体ホログラムから音声がまた流れてきた。

「みなさんしずかにしてくれないかねー」

「私はちよっとイライラしやすいんであんまりうるさいと20人をすぐに奈落の底へと落としてあげてもいいんだよ」

「あー、自己紹介が遅れたねー」

「私はBrack Crystalの四黒王の一人、野嶋って言うんだ。」

と、少し笑いながらふざけた口調で言った。

するとほかの17人のひとりの20代のサラリーマンみたいな男が

「そんなことはどうでもいい！ここはどこだ！俺たちをさらって何をしようとするんだ！」

と大きな声で立体ホログラムに叫んだ。

するとすぐに、野嶋と言う男の声が立体ホログラムから

「全く、腹の立つ連中だね。」

ほんとにいらいらしてくるよ。

まあいっか。

分かったよ教えてあげるよ。」

と呆れたようにながれた。

「うーんとね、君たちにはあるゲームをしてもらおうと思ってるんだ。

まずこの20人を10人ずつの二つのグループに分けるんだ。

そして、その10人ずつであるゲームをしてもらうんだ。

10人中5人が次のゲームに進んであとの5人は死んで

もらうよ

そして残った10人はFinal stageに進んでもらうって言う話さ。

簡単なことでしょ？」

と僕たちをあざ笑うみたいに言った。

「ふざけるなー！俺たちの命をなんだと思ってるんだ！いいかげ

んにしろよ!」

とさっきのサラリーマン風の男が言った。

「はいはい。」

君の言葉はもう飽きちゃったよ。

さてさてさあ今からゲームのルールを発表するよ。」

と、何か楽しんでるみたいにホログラムから音声が、流れた。

ホログラムからは、次のような恐ろしい内容のことが僕たちに言い渡された。

「・ルールは簡単です

・まず私たちが10人の中から犯人役を決めます。

その人の脳内にある、悪抑制機関をバグらせ、その人が殺しを行うように仕向けま

す。そして殺しを行なった人がそれ以上人を殺さないようにします。なぜなら、1

でほかの人を全部殺してしまったらゲームが楽しめなくなるからです。その犯人の

人は、簡単に捕まってはならないためいくつかの殺す道具をその犯人に渡します。

ただしそれはその犯人の人が殺しに役立つ能力をもった人間以外にしか渡しません。

・残った人々には殺人が起きた場合には、その犯人を突き止めて私たちに指摘

してもらいます。ただし、殺人の方法がわからないで指摘押されても、証拠には

ならないため、その人を犯人だとは証明できません。

・指摘してもらおう場所は、Indicationルームで行なってもらいます。

・もし、犯人を突き止めることができれば犯人は殺されます。しかし、万が一、犯人

ではなかった場合指摘した人が殺されます。ただしそれでは誰も指摘したいと思わな

いので、指摘してあたっていた場合、その指摘した人には次からは、殺されないよう

に、次の犯人の人の脳内をコントロールします。

ただし、それがFinalGameの直前だった場合、無効となります。」

僕は意味が分からなくなってきた。

なんで僕がこんな、人が殺したり、殺されたりされるゲームなんかやらなきゃいけないのか。

ほかのみんなも、ガクガク震えていたり、泣いている人もいた。

それとは裏腹に、野島と言う男は

「それでは楽しい楽しいゲームの始まりだよー

なんだかワクワクしてきたなあ

じゃあみんなは、準備はいい？」

と、何が楽しいのやら笑って僕たちに聞いたとたん、なにやら辺が霧に包まれて僕は意識がまたもや、消えていった。



## 第八話　く能力者集うく

僕は何分眠っていたことだろう。

霧に包まれてから多分みんな僕と同じように眠っていたことだろう。僕は当たりを見回してみた。

さっきのエントランスホールの赤色と全く逆の淡いスカイブルーのような壁と床のエントランスホールの半分くらいの空間が広がっていた。

そこには有里華ちゃん斗真、それにさっきの若いサラリーマン風の男、ほかのまだ知らない人々が倒れていた。

とりあえず僕は倒れている人々を1人ずつ起こすことにした。だが、まだあの霧の効果が続いているらしく、誰も起きようとしなかった。

誰も起きずに困っていると、また例のホログラムがいきなり現れて

「いつまで寝てるんだい。

全く苦勞するねー君たちには。

さっさと起きろって言うんだよ全く」

と、イライラしているみたいな口調で音声 flowed。

そっちが勝手に眠らしたのになんて勝手なやつなんだと、思っているとまたどこから白色のきりが噴出された。

また眠らせられるのかと、被っていたら逆に眠気が消えて目が冴えていった。

倒れている人々もすぐに起き上がった。

多分この霧に目が冴える効用でもあったのであろう。

するとまた例のホログラムから

「全く、やっと起きたねこれで。」

さてと、じゃあこれから君たちのこれからのことについて話すね。さっきも行った通り、さっきいた20人を10人、10人の二つのグループに別けたんだね。

君たちは、2つ目のグループにあたるんだ。

ちなみに今君たちがいるところは、クリスタルパレスの中のサファリアの館って言うんだ。

まあ、それよりもせいぜいfinal stageに進めるように頑張れば、

ついでに言っとくけど、逃げようとしても無駄だよ。

あなたたちの能力じゃこの館からは出られないから。

じゃあ殺人が起こったあとに後にまた会いましょう。」

と音声 flowed とたん消えてしまった。

これからどうしようと、思っているとサラリーマン風の人が

「みんな集まってくれないか！」

と、まるでリーダーを気取ってるように言い出した。

とりあえず僕はその提案に従い部屋の真ん中に集まった。

みんなが集まってすぐそのサラリーマン風の男が

「みんな聞いてくれ。」

俺たちは、訳の分からずこの変なところに連れてこられてまだ自体がわからない。

だが俺たちは、変な殺人ゲームに付き合わされてしまったことは説明を聞いてみんな把握



していると思う。

つまり俺たちはとても危険な状態にいると言える。  
だから、ここで孤立してしまうとまずいことになりそうな気がする。

そこで、みんなに自己紹介をしてもらいたいと思う。

意義がある奴はいないか？」

と、真剣な表情で言った。

当然意義がある人がいるわけもなくサラリーマン風の男から自己紹介をすることになった。

「まず俺から自己紹介をする。

俺の名前は白鳥圭一

23才で普通の会社に務めているサラリーマンだ。

俺には、なぜか物質をほかの物質に変えることができる能力がある。

まあ、ロウとか鉛くらいにしか変えることしかできないがな。」

とサラリーマン風の男が僕たちに簡単に自己紹介をした。

ん？……

今こいつ物質を違う物質にできるとか言ってなかったか？

こいつも能力者だったのか、と僕は心の中で思った。

次に、中学生くらいの女の子

「え、えーと私の名前は葉月紅葉って言います…。

そ、そのー15才の中学3年生で、何か分かりませんが子供の  
ときから動物の話が分かるんです。」

その次に太った金持ちそうな男

「おホン。」

私は黒洋幸一郎と言う物だがね。

54才でとある会社を運営しているんだよ。

それで私もなんだが、20代前半から人が嘘をついているか本当のことを言っているかが

分かるようになった。」

4番目に、7、8才くらいの男の子

「自称超エスパー少年新堂翼とは、…俺のことさ！

年は7才なんだぜ！

まあ、エスパーといってもまだ透視しかできないけどな。」

その次に有里華ちゃん

「私の名前は河井有里華っています。

高校2年生で16才です。

私は生まれつき気配に関して人よりも敏感なんです。」

6番目には外人みたいな少年

「ボクノ名前ハ、グレイ・シュバル・剣志ト言イマス。

年ハ、13才デス。

僕ハ、5mだけ瞬間移動能力ガ使エマス。」

次に斗真

「俺の名前は高木斗真です。」

高2の16才。

今まで黙ってたけど、俺は2年前から0.5Aの電流を操ることができるようになった。」

8番目に優しそうな男の人

「僕の名前は、佐藤真一といいます。

町役場でデータ管理をしていて年は22才です。

私は一度見たものは絶対になぜか忘れることがないんです。」

9番目に30才くらいの堅そうな男

「登龍太一

35才

能力はないが、この時代で最後の空手の師範代だ。」

で、最後に僕

「僕の名前は影斗優也です。

高校2年生の17才です。

ぼくは、なぜか洞察力がほかの人よりもすぐれています。」

これで10人の自己紹介が終わった。

とりあえず僕は今の紹介をポケットに入っていたメモ帳に書き写した。

人名

能力

歳

性格

影斗優也

すごい洞察力

17歳

ちよつと暗い

|          |               |     |
|----------|---------------|-----|
| 高木斗真     | 電気操作（0.5V）    | 16歳 |
| 明るい      |               |     |
| 河井有里華    | 気配感知          | 16歳 |
| 優しい      |               |     |
| 白鳥圭一     | 錬金術（限られた物質のみ） | 23歳 |
| 正義感が強い   |               |     |
| 葉月紅葉     | 動物言語理解        | 15歳 |
| シャイ      |               |     |
| 黒洋幸一郎    | 嘘、本当詮索        | 54歳 |
| 金に物をいわせる |               |     |
| 新堂翼      | 透視能力          | 7歳  |
| はしゃぎたがり屋 |               |     |
| G・S・剣志   | 瞬間移動（5mのみ）    | 13歳 |
| 不明       |               |     |
| 佐藤真一     | 完全記憶能力        | 22歳 |
| 優しい      |               |     |
| 登龍太一     | 空手（最後の師範代）    | 35歳 |
| 堅物       |               |     |

ん……？みんながある特殊能力をもっている。  
なぜ能力者を集める必要があったのか？  
それはさておき、斗真まで能力を持っていたとは思わなかった。  
多分斗真も僕に同じ感情をもったことだろう。  
斗真も知られるとめんどくさいことになるかと悟ったのだろう。  
特殊能力をもった人たちとこんな殺人ゲームをしなきゃいけないの  
かと思うとちよっと怖くなってくる。

なんだか嫌なことが起こりそうだ……。



## 第九話　（嫌な予感）

自己紹介も終わり、これからどうしようと思っていると有里華ちゃんが近づいてきて僕に

「優也君、あのー、気づいたんだけどさ、あそこにある扉って何かな？」

と部屋の奥の方にある灰色の扉を指さしながら尋ねてきた。

僕も知る由もなく

「んー、分からないけど、とりあえずみんなに言ってみるのがいいんじゃないかな？」

と、軽く受け答えた。

有里華ちゃんも僕の意見に賛成して、部屋の真ん中に佇んでいる残りの人たちに奥にある扉のことを話してみた。

すると、残りの人たちも、このままここにいてもしょうがないから扉まで行ってみようということになった。

扉までの距離はそんなに長なくて20秒位ですぐ着いた。

扉の前に着いたのだがもちろん誰も開けようとするはずがなく、じれったいので僕が勢いよく灰色の扉を開けた。

するとそこには、意外にも清潔感がただよっている、高級ホテルとまではいかないが、綺麗なエントランスがあった。

僕は、辺りを良く観察してみると、普通の2mくらいの大きさの青い扉が10個、黒い大きな扉が4個並んで壁に付いていた。

みんながエントランスに入り終わると、入ってきた灰色の扉が、自動的にしまっていた。

たぶん僕たちがエントランスに入り終わったら、元の部屋に戻れないようにする仕掛けでも

施していたのであろう。

みんなは、もうさすがに恐怖に満ちていたせいか閉じ込められたと分かってても叫んだりする

人は誰もいなかった。

少しすると新堂君が

「なんだこの立体ディスプレイー！」

と叫んだので、僕は声のする方へ行ってみた。

その場所は、ちょうどエントランスも中心にあたる柱だった。

その柱に、立体ディスプレイが貼り付けてあったのだった。

そのディスプレイには、次の内容が表示されていた。

「1号室 影斗優也

2号室 河井有里華

3号室 G・S・剣志

4号室 黒洋幸一郎

5号室 佐藤真一

6号室 白鳥圭一

7号室 新堂翼

8号室 高木斗真

9号室 登龍太一

10号室 葉月紅葉

11号室 食堂

12号室 倉庫

13号室 管理室

14号室 I n d i c a t i o n ルーム

<注意>

1～10号室には、内側から電子ロックをかけることができます。

ただし、外に出るときは外側からカードキーをさして入る必要があります。

11～14号室には鍵は掛かりませんが、センサーでいつどの時間に入ったか、または出たかが記録されます。

その記録は、管理室で閲覧することができます。

11～14号室からのものの持ち出しは禁止となっています。

もし、ものを持ち出した場合、その人に刑罰を与えます。

殺人が起こった場合、その死体の処理はわれわれが事件解決後、または犯人

が逃げ延びた後に執り行います。

ちなみに、本人以外が自室に入るとは良いとみなします。」

この場所にはこの場所特有のルールが存在するようである。  
するとまたいきなり新堂君が

「俺の部屋は7号室だな！入ってみよーと」

と言いながら誰よりも先に青い扉の中に入ってしまった。

それをみてからみんなもそれぞれの部屋にぞろぞろと入ってしまった。  
僕もそれにつられて僕の名前が書いてあった1号室に入ってみた。

するとそこには、またもや意外にも綺麗な部屋で、バスルーム、リビング、寝室の3部屋があった。

ただ、贅沢を言うなら外を見ることができる窓が欲しいということだけだ。

一通り部屋をまわってみて、リビングで少しくつろいでいると、いきなりテーブルの上にあった立体電話が、なにやら軽やかなメロデューを奏でて鳴った。

僕はいきなり無音の部屋の中が、大きなメロデューに包まれたので一瞬びっくりしたが、とりあえず立体電話のスイッチをポチッと押した。



すると、そこには白鳥さんの姿が映しだされて

「影斗くんかい？白鳥だが、実は10分後に11号室の食堂でみんなとこれからのこと

を話し合いたいと思うのだ食堂に10分後に来てくれ！」

と、早々とした口調で言ってきて、勝手にあっちでスイッチをきってしまった。

この立体電話は部屋同士で通話することができるようだ。

僕は、10分もすることがないと思ったので、電話が来てからすぐにテーブルの上にあった

カードキーを持って食堂に向かった。

廊下に出て食堂まで行くのには2分くらいかかった。

食堂の黒くてでかい扉を開けるとそこにはもう、半分くらいの人たちが椅子の上に腰をかけて座っていた。

僕は食堂を見渡してみた。

すると、テーブルが2つ、椅子が5個ずつテーブルの横に置いてあった。

僕たちの人数とちょうど同じにしたのだろう。

それから10分後くらいにみんなが集まって呼び出した白鳥さんがみんなに向かって

「これでみんな揃ったみたいだな。

それでは、これから俺たちはどうするか話し合っていきたいと思う。

とりあえず俺が短期間で考えたことを話すからみんな聞いていってくれ。」

といって次のような内容の提案を僕たちに言った。

「食事意外の用事で外に出ないこと。

食事が出るときはみんなで時間を決めて一緒に食事すること。  
万が何か用事があつて外に出たい時は、みんなに言ってみ  
んなで行動すること。

連絡は実際に会うのではなく、立体電話で話をする事。

夜は危険なので絶対に外に出ないこと。」

みんなは、別にこの提案に嫌なことはなかったのでこの提案に従う  
ことにした。

「他に提案がある人は、いるか？」

と、白鳥さんがみんなに聞いたが、もちろんだれも答える人はいな  
く、この集まりは、すぐに解散となった。

僕は、カードキーを使い扉を開け、内側の電子ロックをかけると、  
すぐにリビングにあるウォーターソファーにねっころがった。

ただえさえ、この状況をまだ把握出来ていないのだ。

体がいつもの倍以上だるく感じる。

僕は、この悪夢みたいな現実がほんとの夢であつて欲しいと願いな  
がら、深い眠りについていった。

そのころ…

「さーて、そろそろ悪魔の殺人ゲームでも開始するかなー

どんな結果になるのかな？

ワクワクするね

そんじゃいっちょ開始しますかー」

と、本当にゲームを今まさに楽しもうとしているような笑みをうか  
べその男は、頑丈そうな小さな箱を開けた…



## 第十話　夢かはたまた現実か

夜の静かな個室にいきなり軽快なリズムの音楽が流れだした。

「うーん、なんだよー。」

と僕はまだ寝ぼけたまま、机の上にある立体電話のスイッチを押した。

するとそこには、10人の中の一人の紅葉さんの姿があらわれた。

「あ、あのー、優也さんですよ…ね？」

と、恥ずかしそうに僕に聞いてきた。

僕は、寝ぼけながらも、

「はい、優也ですけども…何か僕に用事でもあるんですか？」

と、紅葉さんに、質問した。

すると、紅葉さんは僕に

「あのー私のこと覚えてませんか…？」

前に同じ小学校だったと、思うんですけど…」

と、僕に言ってきた。

小学校の頃をふと思い返してみた。

そういえば僕は1度だけ小学校6年生のとき生物係になったときがあった。

そこで、確か自分より2つ学年が違う女の子と一緒にうさぎの世話をしてたっけ。

でも、名前まで聞かなかったから本人かどうか断定はできないが、確かに前みた女の子と

紅葉さんの面影が一致していた。

「もしかして国分第一小学校で、生き物係で僕と一緒にうさぎの世話やってたあの子？」

と、おそろおそろ聞いてみると、

「はい、覚えててくれてたんですね。

なんだか嬉しいです。」

と喜んでいるような様子が音声と映像から分かった。

ところで、何か他に用事があって電話してきたんですか？」と聞いてみた。

すると紅葉さんは

「実は私なんだか今私が置かれている状況がいまだに理解できなくて…。

それで、面識のある人に相談したくて。

一人でいると心が張り裂けそうで。」

と不安な表情を浮かべながら言ってきた。

「実は僕も何が今起こってるかわからないんだ。

誰だっっていきなりこの薄気味悪い館に連れてこられたらそういう気持ちになると思うよ。

だから、また不安になったことがあったら、僕に相談してね。

まあ、少ししか役に立ってないだろうけど。」

と、僕は照れながら紅葉さんに自分なりに優しい言葉をかけてあげた。

紅葉さんは、

「ありがとう優也さん。

おかげで少しは気持ちが落ち着きました。

夜遅くに起こさせてすいませんでした。

では、また朝話しましょうね。」

と、さっきより落ち着いた口調で僕に答えて紅葉さんは立体電話の電源を切った。

僕は、何かいい気分でソファ―に横になって深い眠りに落ちた。

翌朝あのようなことが起きているとは知らずに…

## （サファイアの館 二日目）

僕は、また部屋の中に鳴り響く立体電話の音楽で目を覚ました。

僕は昨日夜中に起きてしまったのでまだ眠い状態で立体電話のスイッチを押した。

すると、白鳥さんの姿が映し出された。

「やあ、影斗くんか、

今日も分かっていると思うがみんなで朝食を食いたいと思う。

だから、十分後に食堂に来てくれ。」

と、お決まりの言葉を言い終えたらすぐに立体電話の電源を切ってしまった。

僕はめんどくさいなと思いながらも昨日と同じように早めに食堂に向かった。

食堂につくと、まだ、誰もいなかった。

だが、少し待っていると真一さんと登龍さんが、もっと待つと有里華ちゃんと斗真と紅葉さんが、12分くらい待つと白鳥さんと翼くん、

剣志くんが来た。

「さあ、みんな揃ったな、早速今日の段取りを決めよう」と白鳥さんが言い終わったあと、翼君が

「あれー」

太ったおっちゃんがないよー。」

と言い出した。

「太ったおっちゃん？」

ああ、黒洋さんのことか」と僕は、理解した」。

するとみんなも黒洋さんがいないことにきずいた。

「おい、黒洋さんは、どうしたんだ。」

「まだ寝てるんじゃないか。」

ということになってみんなで黒洋さんの部屋に行くことにした。

少しして黒洋部屋についたがオートロック式なので開かなかった。

みんな開かないので

「どうしよう」

「入れないじゃないか」

と、がやがや言っていたら、登龍さんが

「ちょっと待っておれ」

といって、何かのかまえをした。

「登龍式空手術龍口撃！！」

なんか登龍さんがすごい技を使ったとたんドアがすごい音を立てて

壊れた。

「あんな技をくらったら人間なんかひとたまりもないな」と僕は思った。

そして、壊れたドアの向こうには女の子の叫びと共に黒洋さんの赤く染まった無残な死体が横たわっていた。

夢なら早く冷めてくれ……



## 第十一話　争いの予感

僕は心が真っ白になった。

なにせ、初めて人が死んでいるところを見てしまったからだ。僕は、意識がもうろうとしてそのまま床に倒れ込んでしまった。

「ゆ……やさ……」

「優也さん！」

僕はその声で目が覚めた。起きると紅葉さんがそばにいた。

「大丈夫ですか……心配したんですよ……本当に」と、涙目になりながら僕に問いかけてくれた。

「また僕は、女の子を泣かしてしまった。」

「なんて僕は馬鹿なんだ。」

「これからほかの人を絶対に泣かせることはしないと心に誓った。」

「ごめんね心配をかけて。ところでみんなはどこへ行ったの。」と紅葉さんに問いかけた。

「皆さんは食堂で話し合ってると思いますよ。」

「私たちも優也さんが落ち着いてから食堂に行きましょうか。」と優しい口調で僕に答えてくれた。

「僕はもう大丈夫だよ。」

「さあ、食堂に行こうか。」

と彼女に心配をかけさせたくないから嘘を付いて笑いながら答えた。

「それなら良かったです。」

「じゃあ行きましょうか。」

と紅葉さんは納得した様子で僕と食堂に向かった。

食堂に着いたら、斗真と有里華ちゃんが僕に近づいてきて

「ユーヤン心配したんだぞ。」

「優也君大丈夫？ 具合はもういい？」

と僕に声をかけてくれた。

「僕はもう平気さ。それよりやっぱり黒洋さんは…。」

と、またも嘘を付きながらに斗真たちに聞いてみた。

「うん…残念ながら。」

と、斗真は悲しげに答えた。

「やっぱりそうか… で、犯人の目星はみんなでつけたの？」

と、僕はおそろおそろ斗真に聞いてみた。

「それが……。」

と、みんなの方を指さしながら斗真は言った。

指差す方を見てみると残った人々が争いをしていた。

「お前が殺したんだろ剣志！」

「ナンデ僕が黒洋サンヲ殺サナイトイケナインデスカ白鳥サン！」

「お前しか黒洋さんを殺せる奴がいないんだよ。」

「ナンデデスカ！ イイカゲンニシテクダサイ！」

どうやら、剣志さんと白鳥さんが言い争いをしているようだ。

とりあえず、このままだとなんか大変なので二人をなだめることにした。

「お、落ち着いてください」

「なんで、剣志くんが犯人だと決め付けるのですか。」

すると、白鳥さんがいかにも自身があるように答えた。

「だって考えてみろよ！」

「黒洋さんの部屋には鍵がかかっていた。」

「つまり、部屋は密室であった。」

「だが、ここにいるみんなの中に密室でも殺せる奴が一人だけいる。」

「その一人が剣志だ！」

「なんで、その一人が剣志くんなんですか。」

と、僕は白鳥さんを問い詰めてみた。

「お前、最初に聞いてなかったのか、奴の能力を！」

「剣志は5mだけ瞬間移動できるんだぞ！」

「つまりだ、剣志は鍵がかかっているにも自由に部屋に出入りできるってことだ！」

「つまり、剣志が犯人なんだ！」

と、僕に強い口調で言ってきた。

「それだけで、剣志君が犯人だと決めつけるのは早くないですか！」

「他にだって殺せる人がいるかもしれないじゃないですか！」

と、僕は白鳥さんに強い口調で言った。

「そんな奴いると俺は認めない！」

「いるというなら自分で証拠を持ってこいよ！」

と、白鳥さんはそっぽをむいてしまった。

そう言われても証拠なんかつかめるわけないしどうすればいいのか  
…僕にはわからない。

そんな時だった、今まで口を閉ざしていた登龍さんが口を開けた。

「いいかげんにせえ！」

「ここで言い争いをしてどうする。」

「少しはおちつくのだ！」

その声でみんな少し心が冷静になった。

「とりあえず、なにか犯人の手掛かりになるものはないか探した方が  
いいんじゃないか。」

ということになったので、僕たちは次の2つのグループに分かれて  
証拠を探すことにした。

## 1班

白鳥圭一

新堂翼

G・S・剣志

佐藤真一

## 2班

影斗優也

高木斗真

河井有里華

葉月紅葉

登龍太一

これから、どうなってしまうんだろう僕たち……

## 第二話〈不明な証拠〉

僕たちはとりあえず殺人現場、つまり黒洋さんの部屋に向かうことにした。

「黒洋さんはどうして殺されなければならなかったんだろう？」

「なにか、理由があったのだろうか？」

と、ふと考えながら部屋の前についた。

ドアノブはスルッと回った。

中に入ると見たくはなかったがやはりまだ黒洋の死体が横たわっていた。

女の子にもう見せるわけにはいかず部屋に入ったのは「僕と斗真さんと登龍さん」でいくことになった。

「有里華ちゃんと紅葉さん」は外を探してもらうことにした。

僕はとりあえず死体を見たくはなかったが調べることにした。

黒洋さんの死体はもう冷たくなっていた。

これが生きていた人間の体温だったとはもう考えられなかった。

ん？ 僕の視線が死体の一部に集中した。

黒洋さんの腹部に刺し傷があった。

だが、凶器みたいなのは部屋の中には見あたらないし、腹部に刺さってもいなかった。

一体どこへいったのだろうか。

犯人が証拠隠滅したのだろうか。

今は僕にはわからなかった。

とりあえずこの部屋から得られるものはなさそうだ。

「とりあえずグループで合流してみるか」

ということになったのでそれぞれ得た情報を交換することにした。

話し合った結果次の内容のことが分かった。

- ・まず、凶器は見つからなかった。
- ・死亡推定時刻はみんなが分かれた午後11時からみんなと合流した午前7時までの間
- ・黒洋さんの死因は鋭利なもので刺されたもよう。

その他にきになったのが次の1つだ。

- ・壁にヒビが入っていた。
- 確かにこの館に入った直後はなかったはずだ。  
誰が何でひびなんか入れたのだろうか。  
わからないがのちのち分かるだろう。

とにかく、そろそほかのグループと合流しよう。

と、みんなに言うと言僕は僕たちは食堂に戻ることにした。

黒洋さんの死体を後にして・・・

食堂に戻ったときにはもう、みんな集まっていた。

「遅いよ、にーちゃんたち!」

「結構待ちましたよ。」

とか、言われてしまったが気にしないで僕は何か見つけたもののや気づいたことがないか聞いてみた。

すると以下のことがわかった。

- ・食堂を探したところ、キッチンタオルが1枚消えていたこと。
- ・凶器はみつからなかった。
- ・凶器を捨てれそうなどころはなかった。

このヒントで本当に犯人が分かるのだろうか？

いや、絶対に見つけなければならぬ。

犯人がわからなければ黒洋さんは報われないだろう。

と、ぼくは心の中で決心した。

ちょうどそのとき・・・

「はい時間終了！さあ、真犯人をあててもらいましょうかねー！」  
と言う声とともにホログラムが現れた。

ついに来てしまったか。

悩んでも仕方がない行こう！

僕たちは重い足取りでIndicationルームへ向かうことにした。

どうなるのかそれは神のみぞ知ることだ・・・



### 第一三話　死闘の始まり

僕たちは黒洋さんの殺人の謎を説明するためにIndicationルームに入ったはずだったが以外にもそこには意外な光景が広がっていた。

なんと、学校の体育館ほどある空間が広がっていた。真ん中には何かホログラムを表示させるような空間がその周りに遠い間隔で椅子が9つ置いてあった。

「なんなんだ、この広い部屋は」  
と、言ったとたんに

「この部屋はねえ　君たちの運命を決める部屋だよ」  
と真ん中のスペースにホログラムが映し出された。

この声からしてたぶん野嶋だろう。

「この野郎！お前たちのせいで1人死んでるんだぞ！」  
と、いつもの斗真とは思えない様子で言った。

「今のうちにほざいてるといいさ、次死ぬのはきみかもしれないからねえ」

「さて、そろそろゲームをはじめようかー」  
と野嶋がイライラした口調で言ってきた。

「おまえ！この・・・」

僕が言いかけているにもかかわらず

「ざあ、あなたがたも知っている通りこのゲームのルールは次の通りだよ」

と何もなかったように平然と言った。

その内容とはしつこいようだが次の通りだ。

「犯人を突き止めることができれば犯人は殺されます。しかし、万が一、犯人

ではなかった場合指摘した人が殺されます。ただしそれでは誰も指摘したいと思わな

いので、指摘してあたっていた場合、その指摘した人には次からは、殺されないよう

に、次の犯人の人の脳内をコントロールします。

ただし、それがFinal Gameの直前だった場合、無効となります。」

「それじゃあ早く名前が書いているから席にすわってくれないかね、時間をもったいたくないなんだよ。」

と、よりいっそうイライラしているようだ。

「仕方がないから座ろうか。」

ということになったので自分の名前がある席に座った。

「じゃあ、今回の殺人の概要を説明するから、ちゃんと覚えてよね、何回も説明するのめんどいから」

と言いながらまた話し始めた。

「今回殺されたのは黒洋幸一郎（故54）、生前とある大手企業の社長だった。

彼の能力は人が嘘を付いているか本当のことを言っているかが分かる能力だった。

死亡現場は被害者の部屋である4号室である。

死亡推定時刻は午後11時から翌朝の午前7時の間だと推測される。彼の死因は心臓に刺さった刃物による刺死凶器はまだ見つかっていない。」

「というところかなあ。」

と野嶋が意外にもわかりやすい説明をした。そのあとにまた野嶋の声が聞こえた。

「じゃあ、このIndicationルームの進行の仕方を説明するよ。」

まず君たちの中から犯人を指摘するリーダーを決めてもらいます。そのリーダーが決まったら今度はサブリーダーを決めてもらいます。

サブリーダーがなぜ必要かというリーダーがもし殺人者だった場合ほかの人が終わりでしょ？サブリーダーはもしリーダーが犯人の選択を間違ったとしても殺されません。」

「次にここにいる全員から事件に関する話を証言してもらいます。不振な行動や態度を取っているとうたがわれるかもね」

「その次にリーダーが聞いた話をまとめて推理してみんなに推理を聞かせます。」

その推理をみなさんで話し合っって本当かどうか決めましょう。

ちなみに推理は一回だけ考え直すことができます。

サブリーダーは、リーダーの推理に対して一回だけ違う推理をぶつけることができます。」

「で、運命のジャッジタイムって感じだね。」

説明はこれで終わりみたいだ。運命は神のみぞ知る。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6856u/>

---

Strange Labyrinth

2011年10月10日11時17分発行